

# デューイにおける「生の素材」再考

—内的素材を中心に—

Reconsidering “Raw Material” in Dewey’s Philosophy of Education

—Focusing on Inner Materials—

山 上 裕 子\*

YAMAKAMI Yuko

This paper aims to reconsider the “raw material” in Dewey’s philosophy of education. I analyzed the “raw material” in Dewey’s theory of education, but did not consider it thoroughly from the perspective of inner material. This paper reconsiders the “raw material” in Dewey’s philosophy of education to explain knowing.

First, I discuss the meaning of a child becoming engrossed in play through involvement with an object. Second, I consider the relationship between engrossment and disposition. Third, I clarify the role “raw material” plays in the growth of childhood. Finally, I will analyze how the “raw material” provides a key to understanding education.

## はじめに

近年、プラグマティズムの哲学・思想研究が盛んにおこなわれている<sup>(1)</sup>。周知のようにプラグマティズムは、南北戦争による傷跡冷めやらぬ1870年代、若者たちが皮肉と反抗の気持ちを込めて「形而上学クラブ」(The Metaphysical Club)と称して議論する場を設けたことに始まる。20世紀に入りしばらくすると論理実証主義におされ、一時哲学・思想界の主流から外れるが、1950年代より再び議論の俎上に載り現在に至っている。浮沈を経てなお再考なされている理由は一様にいえないが、哲学者伊藤邦武は哲学・思想上の特徴からその理由を以下のようにみている。プラグマティズムが問おうとするのは、認識の真理性の絶対的な根拠を求めることでも、その可能性の理由を定義することでもなく「真理を求めようとする場面において、われわれ人間が採用すべき対話の形式や、枠組みの在り方」であり、その「追求」のスタイルにおいて「開かれた柔軟な哲学という特徴」をもつ、それゆえに、多くの哲学者たちのアイディアを受け入れ吸収する力をもってきた<sup>(2)</sup>。

具体的に名をあげておこう。パース (Charles S. Peirce)、ジェイムズ (William James)、

---

\* 幼児教育学科

デューイ (John Dewey) らに代表される古典的プラグマティズム。そこに新たな生をもたらした「経験主義の二つのドグマ」(“Two Dogmas of Empiricism”, 1951) の著者クワイン(Willard V. Quine)。その後、ホワイト (Morton White)、セラーズ (Wilfrid S. Sellars)、そしてデイヴィドソン (Donald Davidson)、パトナム (Hilary Putnam)、ローティ (Richard Rorty)、バーンスタイン (Richard Bernstein)、ブランダム (Robert Brandom)、マクダウェル (John McDowell) らによるいわゆるネオ・プラグマティストと呼ばれる面々。これらによる主張は個々人の哲学的影響の違いがあり、議論の焦点が多様で一括りにすることは難しい。更に現在、連帯や共同体の重要性に大きなシフトを敷くローティ流のプラグマティズムへの流れを、傾き過ぎとし、古典的プラグマティズムの再評価をとおして、新しいプラグマティズムを目指す動向がある。パースへの注目が、その動向においてなされている<sup>(3)</sup>。「プラグマティズムとは何か」、「どのような点が評価されるのか」、「現在のわれわれに何を示し得るのか」等、プラグマティズムは、今、議論の最中にある。

さて、論者はかつて教育学から、デューイのいう「生の素材」(raw materials, crude materials)を取りあげた。それは、レディ・メイドの教材(教科用図書など)の使用と比較するならば、外部刺激としての教材ではなく、自ら問いを立て探究することをとおして、事実を知覚するセンスを獲得し、現実感覚に基づいて直接経験できないものを見抜く洞察力を養成するところに教育的意味を見出せるものであった<sup>(4)</sup>。すなわち、探究活動を可能にする知性に、デューイの眼目があったのだ。

デューイのいう知性は、外部から事象の内部に分け入るものではなく、「自然的出来事の内部から発生し、自然的出来事のプロセスを意図された帰結へと方向づける性向」を意味する<sup>(5)</sup>。そして、傍観者理論ではないために、情緒や感情など、言語化の極めて難しい領域が問題となってくる<sup>(6)</sup>。「生の素材」をデューイは、物質的なモノにとどまらず心的な一面にも言及しているが、論者は、この点への接近が十分ではなかった。

プラグマティズムの動向を顧みると「生の素材」は、しばしば議論の対象となってきたことがわかる。例えばジェイムズは『根本的経験論』(*Essays in Radical Empiricism*, 1907)で、知ることを説明する文脈において、以下のように言及する。あらゆるものを構成する素材(stuff, 物的/心的)を「純粹経験」とし、知ることは、純粹経験の諸部分が結び得る特殊な種類の相互関係である<sup>(7)</sup>。

そしてセラーズは、経験をとおして直接得られる「データ」(与件)、特に感覚与件について誤謬が入る余地はなく「所与の神話」として正当化するみかたがあるが、認識は「理由の論理空間」(the logical space of reason)という規範的領域において様々な関係性のもととされるのだから、「データ」に正当性を求めるのは誤った理解である、と主張する<sup>(8)</sup>。

本論では、このようなプラグマティズムでの議論を踏まえつつ、今一度デューイのいう「生

の素材」を内的な側面から再考する。それは、成長において知ることの意味を言語化の難しい領域の観点を改めて明確にする作業である。教育関連の著作で言及されることの多い「生の素材」であるが、最終的に教育関連以外の著作『経験としての芸術』(Art as Experience)を取りあげ、心的な側面に触れることになる。

## 一 夢中ということ

プラグマティズムで共有される志向の一つに、分析—総合、心—身、主—客などの二元論的対立の拒否がある。特にデューイは、二元論への闘いを徹底しておこなった人物である。多くの哲学者にならって、本論でも一元的世界を子どもの遊びにみるところから始めよう。

幼児が遊んでいる姿を眺めていると、子どもたちは明確な目的や活動の意味を意識して遊び戯れているわけでないことに、改めて気づかされる。時には気まぐれに近づき、そして走り去ったり、周囲からの呼びかけを一切気にすることなくただひたすら粘土をこね、まるめることを繰り返し続けたり。幼児は、活動そのものに充実を感じるからこそ遊ぶのだ。<sup>(9)</sup>

我を忘れて夢中になって活動していることについて、デューイの著作を紐解くならば、興味の記述にそれを見ることが出来る。

英語の“interest”は「間にある」というラテン語を語源にもち、個人と外界の素材との隔たりをなくすことを示している。デューイは「それ自体に満足する」、「目的は現在の活動であり」、「純粹に美的な鑑賞の型」、「現在の対象に没頭(engross)する」、「価値はそこにあり」などといい、これを直接的興味と呼ぶ。そして遊び(play)をここに位置づける<sup>(10)</sup>。

またデューイは、この「間」を時間的なある経過に位置づけるところに教育的意味を当てる。それまで関心のなかったものが、ある経過を経て関心をもつようになる間接的興味のことである。もちろん彼は、直接的興味とこの間接的興味に線を引かない。より長い時間の経過が続く活動において、間接的興味は直接的興味へと変わるのだ<sup>(11)</sup>。双方は、活動において発展的に循環するというのである。

具体的にみてみよう。幼児が昆虫をみて、名前は何か、何を食べるのかと疑問をもち、それまであまり関心のなかった図鑑を開くことは、よく耳にすることである<sup>(12)</sup>。幼児にとって新奇なものに参入することになるわけだが、デューイはそこに好奇心を指摘する。それは、「新しい接触をなすために出かけ」、「経験そのものに夢中になり、経験の拡大を絶え間なく積極的におこなう傾向」、つまり、エネルギーの溢れ出たものをいう<sup>(13)</sup>。ゆえに、間接的興味は、好奇心を満たすものとなる。したがって、たとえ大人が既に知っていることでも、本人にとっては発見であり、それは豊かな経験をかたちづくるというデューイの主張へとつながる。このような幼児の自発性に、彼は知的独創性の原点をみている<sup>(14)</sup>。大人の手を加えない「生の素材」

を使用することの理由の一つである。

このように、興味がとりもつ「間」を、より一層の、という時間的経過に置くことで、興味はある活動のコースにおいて自己を見出し、より一層充実した活動へと進んでいく推進力と説明される。

次に、夢中について道徳的な側面にも触れておこう。デューイは、外界に心を開き、ひたむきに対象と関わり、誠実に対象を捉えることを、望ましい思考態度としている<sup>(15)</sup>。そこには、よい成績をとるため、人に尊敬されるためなどという、思考それ自体の目的以外の目的はない。もちろんこの言説は、問いを解く探究活動におけるものである。だが、彼が幼児の自発性に知的独創性の原点をみたように、幼児がひたすら対象と関わりもっている姿に、道徳的な萌芽をみていたとしても何ら不自然なことではあるまい。「遊びと作業は知ることの初期段階の諸特徴といちいち一致する」、そして「教育的な成果は、遊びと仕事のある結果」なのである。<sup>(16)</sup>

ところで外界の対象との一体化それ自体は、あくまで自己の実感に由来する個人的なものである。もちろん、これを孤立したものと理解してはならない。活動は、現実社会の中のある行為であり、素材は他者と共有されうる現実のものである。デューイのいう経験は、試みる能動的要素とその結果を受ける受動的要素を含んでいるから<sup>(17)</sup>、夢中になっている活動はある社会を受け入れている真最中、ということになる。ただ、そのときは、それ以外の外界との接触はなされていない。興味ある活動は、経験「それ自身をこえたものの中につれていくことを要求しない」<sup>(18)</sup> 制限をもつものといえる。

以上より、夢中ということは、デューイにおいて、直接外界と一になっている姿として認められる。それは外界との関わりをとおして知るという原点として、そして自身の経験の更新を可能にするであろう知性の萌芽の在り方として理解される、経験の質に関わるものである。だが夢中はまた、ある特定の社会の中でのこと、という但し書きが付く。

## 二 潜在的パワーとしての性向

教育の目的を成長それ自体にみるデューイにおいて、成長を可能にするために未成熟な性向をより知性的、より社会的に育てていくことが教師の役割となる。性向についてデューイは習慣の本質と位置づけ、以下のようにいう。「準備傾向」「機会があるときはいつでも独特の様式で行為できるレディネス」「扉が開いたらすぐに飛び出そうと待ち構えている」、行為に現れる以前の、潜在的なものである<sup>(19)</sup>。だから、たとえ生涯で一度きりしか起きないとしても、ある行為は潜在的な性向に蓄積されたものが現れたと説明される。谷口のことばを借りるならば、行為は、「行為発生の潜在的起源としての『性向』や『準備傾向』の永続的パワー」があつてこそのこととなる<sup>(20)</sup>。

この性向は、環境との関わりにおいて形成される後天的なものであり、衝動は性向に従属される。人が生まれて間もないとき本能的活動がみられるが、幼子は習慣をもつ大人がいなければ生命を維持できない。仮に生来の活動が存続されたとしても、それは何の役にも立たないだろう。生来の活動の意味は、獲得されるものだからだ<sup>(21)</sup>。幼子の衝動は、大人たちのもつ知識と熟練に同化する単なる出発点であり、やがて独立した行動を可能にする栄養分を集める触手に過ぎないのである<sup>(22)</sup>。ただ、衝動はどのようにでも性向に組織化されうる。ここに、どのような性向がどのように組織化なされるのが望ましいか、という教育的課題が生じる。

デューイは衝動を、慎重に、人間的に扱うようにいう<sup>(23)</sup>。大人のもつ習慣を再生産することとは逆の、柔軟に再調整できるような習慣を形成することになるような取り扱いである。それは「探索、発見、創造」の方向に、また想像的な洞察力が働くように生来的活動を導くことを意味する<sup>(24)</sup>。そしてそれは、自身のことのみならず、大人が築いてきた習慣を変えることの可能性も射程に入れる。

このようなデューイの論理の背景には、幼子の自然的衝動を認め、幼子の知性を信じる彼の子ども観が基底にあることは、いうまでもない。

デューイは、幼子を永遠の理想化した存在にみたてる根拠としてあげられる点を以下のように指摘する。「成長は(自然に対して)変則的ではなく正常である、活動は課題ではなく喜びである、習慣形成は収縮ではなくパワーの拡大である」ということを証明してくれる<sup>(25)</sup>。大人は、幼子が対象に対して関わる際に見せる「熱心さ」、「生き生きした真摯さ」を羨む<sup>(26)</sup>。もちろん、彼は子どもを理想化することを是とはしない。「自然へ帰れという装いのもと、ロマンティックな自由を夢み、あらゆる生命の衝動、その場に合わせた自発性と新奇なインスピレーションの連続的源泉」を可塑性のあるものとして、そして硬直した習慣の再組織化の能因として利用するのだ<sup>(27)</sup>。デューイは子どもを理想化する根拠となる子どもの姿を、他と共有する。だが、それを究極的なものとはせず、われわれの生活において如何に扱うか、という扱い方へ論を展開するのである。

ここで、性向と夢中になっている活動との関連について触れておこう。

年齢が上がるにしたがって教育の大半は、ことばを用いた間接的なものになる。もちろんデューイは、ことばを用いたものであっても、自身のそれまで得た経験と関連づけることを要求する。肝要なことは、夢中になっている活動が、心に直接訴えるものとなっているかどうかである。彼は、活動をとおした作業に、知的な質や完全さをみる。それは、単なる物理的なことではなく、諸問題との接触、基本的な知識の獲得、操作できる技能、そして発見や驚きなどの情動を含んだものを指す<sup>(28)</sup>。こうして、生来的にもっている力は、環境との関わりをとおして如何に使用したらよいのか、意味あるかたちをなしていくことになるだろう。そして、今後の先を見通す力になるだろう。その後の行動をコントロールする力、望ましくない結果を避けること

にもなろう。デューイはこう主張するのである。

ところで、このような直接的活動をとおしてかたちづくられる性向は、時間の効率性からすると大変不経済なものである。だが、ラボラトリー・スクールの実践で教師たちは、子どもたちにレシピどおり料理をさせず、なぜ、このような調理方法がとられるようになったのか、という理由が理解できるように、鶏卵（「生の素材」）の研究へ導いたように、デューイは子どもたちに一つひとつ活動を吟味、熟考させることを要求する<sup>(29)</sup>。なぜなら、年齢を問わず「興味をひき、熟考を求める状況のもと、漸進的に累積していく企て」に従事できる場合においてのみ、性向が「明らかに行為の中のある有機的な要素」となるからだ<sup>(30)</sup>。歩くという習慣が目覚めている間中作用するだけでなく、静止しているときや夢の中でさえ、みる者の中に表現されるように<sup>(31)</sup>、有機的な要素となった性向は外に飛び出す機会を得るまで底流に潜むのである。

以上より、性向は行為を起こす際の潜在的パワーとして理解される。そして夢中ということは、このパワーとしての蓄えを可能にする条件と考えられる。それは、自然的出来事の内部からかたちづくられる自然的知性の質を保証する要素、すなわち、探索、発見、創造そして想像的な洞察力を提供する。目的は、活動そのものにあり、熟考を求める漸進的な累積による性向の蓄えこそが、デューイが教育目的に掲げた経験の更新を可能にするパワーとなる。知識は、デューイにおいてこのような経験の更新とともに獲得される。もちろん、知識はあくまで「言明可能性」の範囲を超えず、新たな探究において再編される。

### 三 「生の素材」の意味

「まず、生の素材からはじめ、それを、目的をもって取り扱わせることによるのみ、生徒は完成された材料の中に具体化されている知性を獲得することになる」<sup>(32)</sup>。デューイは、1916年、『民主主義と教育』(*Democracy and Education*)で、フレーベル派の幼稚園やモンテッソーリ (Maria Montessori) の子どもの家で使用されている、決められた手順で正解に至る教材に対して、「生の素材」の使用を主張する。大人によって決められた手順で正解を要求することは、子どもの経験を信頼することにはならないし、子どもの経験を大人が思うとおりすることである、と批判する。そして、子どもの直接の生の経験を信じよというのである。

繰り返すが、外界との関わりは必ずしも教育的なこととは限らない。デューイは流動し、累積していかない活動を単なる変化とし、運動から完成へ、破壊から再結合へ、という環境との関わりにおける能動/受動をとおしたスパイラル状の均衡の回復過程があるものに、経験ということばを当てる。彼の主張に従うならば、人の手がなるべく入らない「生の素材」をとおした活動が、この経験を可能にするものなのだ。

さて、全的な経験を、生物学上における有機体の均衡の回復リズムとしてみる見方は、デューイの思索の初期から確認されるものである<sup>(33)</sup>。1930年代には、内的調和のリズムとして(『経験としての芸術』)、また、探究の理論の基盤として(『論理学』Logic)展開されていく。均衡回復のリズムは、彼の哲学的思索において一つの筋をもって展開していくが、「生の素材」の意味に関しては、『民主主義と教育』にはみられない主張が『経験としての芸術』で述べられている。この点をどう考えるかは、稿を改めて論じる必要がある<sup>(34)</sup>。ここでは、『経験としての芸術』に記載されている内的調和と「生の素材」の関係の確認をとおして本論の目的を果たしたい。

デューイによると、内的調和は環境との調整がまとまったときのことを指し、そのとき、われわれの存在の深淵に達する成就の喜びと幸福が生まれるものという<sup>(35)</sup>。それは、現実を超えた偶然によるものではなく、現実の外的素材との関わりに新たな関係をつくり、過去に蓄えられてきた私的な感情や感覚である内的素材が、事物や出来事との活発な交流において、響きあうことによる幸福である。デューイは、エリオット (George Eliot) を援用する<sup>(36)</sup>。

これらの親しみのある花、聞きなれた小鳥の鳴き声・・・は、われわれの心象 (imagination) の母国語である。それは、背後に子ども時代の束の間の時間を、解きほぐし難い微妙な連想とともに、豊富にもっていることばである。今日、伸びた草の葉に輝く陽光をみるわれわれの喜びは、もし未だわれわれの中に生きて、われわれの知覚を愛に変える、遠い昔の太陽の輝きや草をみた喜びがなかったら、疲れ果てた魂の弱々しい知覚以上の何ものでもないだろう。

ハドソン (William H. Hudson) が少年時代、アカシアの木の葉にみた月明かりの神々しさに神秘を覚えた経験を、デューイは経験の一つの次元と認めるように、現実にある外界との関わりをとおして感じた永遠なるものの知覚を排除しない。「生物が環境との原始的関係の中で獲得した性向、明確な知的な意識の中では回復できない性向の共鳴」が、外界の事物との接触によって掻き立てられたと説明する<sup>(37)</sup>。いわゆる形而上学による基礎づけ主義の立場をとらないデューイだが、この世において外界のある対象を生き生きさせる経験の位相を指摘する。環境と関係をもつとき、それ以前に性向に蓄えられたものとの共鳴が、自己と外界との調和を可能にする、美という性質が生命力として関わってくることになる。環境との関わりにおいて内的調和を果たす共鳴には、内的素材としての「生の素材」がある一つの機能を果たすことが前提となっていることが確認できる。

デューイは内的素材を、「原初的」「未加工」「自然のまま」「混沌」「本源的」などと言い換え、心象、観察、感情に関するものという<sup>(38)</sup>。この「生の素材」は人がある状況において、かつての出来事を思い出し、成就の道をたどるとき、「それこそ経験だった」と知られるもの

となる。それは、混沌とした素のままのものから、新たな状況において外界の事物との関わりをとおして共鳴を感じつつ発見される。

この内的素材は、素のまままで表出されるのではなく、外的素材をとおして、具体化され発揮されるとともに、新たなかたちに変形される。神秘的感情は、建築などのように、外的な「生の素材」を加工し、変形し、新たなかたちをつくることをとおして、具現化され、内的調和が果たされていく。

デューイはこのように「生の素材」について、外的、内的と分けて述べている。だが、外界の事物との関わりをとおして蓄えられたものは、新たな状況において、内的素材として機能し、また、新たな状況における外的素材は、それまでの内的素材と共鳴することで、新たな内的素材となっていく。「一つの経験が他の経験を<知るもの>として機能する」と、かつてジェイムズが述べた主客の連続性の主張が、ここでデューイによって展開される。つまり、外的および内的という表現は、主客の連続性の機構をことばで説明したものなのである<sup>(39)</sup>。

ところで、具体的な活動そのものは厳密には一回限りのものだろう。特に質に関しては、具体性を帯び、個別の独自性をあらわす。全く同じ赤をもつ夕焼けはないのであり、赤は常に「その経験の素材の赤なのだ」<sup>(40)</sup>。しかし一方でデューイは、「生の素材」に「コモン」(common)を指摘する。それは、他の人(過去、現在、未来を含めた)も手にとって活動可能な共通材であるという外的素材の意味とは異なる相の、多くの人の経験の中に見出される内的な共通性である。「『普遍』とは、あらゆる経験に形而上学的に先立つ何ものかではなく、特殊な出来事と場面をつなぐものとしての、経験の中でものごとが機能する仕方である」<sup>(41)</sup>。草の葉に輝く陽光に喜びを見出し、アカシアの葉の月明かりに神秘を感じるという経験は、極めて個人的なものではあるが、能動と受動が経験深くに浸透すればするほど、素材の作動の仕方は共通のものとなる。人や自然とのコミュニケーションの過程に、潜在的に共通性を求める衝動がある、というのだ。

このように、内的な側面において「生の素材」は、他者との関係を可能にする素地として示される。性向に蓄えられた「生の素材」は、その後の経験の連続を可能にするための生命力の源泉である。そして経験が経験の深淵に分け入るとき、他者と共有可能という「コモン」を帯びた「生の素材」となる。

## おわりに

以上より、「生の素材」の内的側面を考察してきた。「生の素材」は、その後の発展的経験を可能にする性向の素地を用意するものとして位置づけられる。それは、新たな状況において、ある経験の意味を発見し、他者との関係を可能にする機能をもつ。もちろん、このような機能

を果たすような「生の素材」の獲得は、探究という経験を可能にするために、人の手のなるべくく入っていない外的素材としての「生の素材」の使用をとおして成立する、ということになる。

はじめに、でセラーズの「理由の論理空間」について少々触れた。デューイは、外的環境との相互作用に経験という概念を与え、経験にある特定の社会の中、という制限があることを認めている。一方で、内からの成長における個人的に感じたことを認める。個人が神秘を感じたことに、他者にも共有可能な内的素材として作動する可能性をみる。もちろん形而上学を拒否したデューイは、そこに議論の余地のない正当性を与えはしない。あくまで「コモン」としての機能面に限定をしている。「私」の経験に「コモン」をみる道筋を残しているのだ。ここに、「生の素材」は、他者との共通性の素地となり得る概念であることを確認できる。現在のプラグマティズムとの議論は、今後の課題である。

#### 註

デューイの論稿は、Southern Illinois University Press (USA: Carbondale) で出版され、Jo Ann Boydston によって編集された全集を使用した。註のEWは、The Early Works を、MWは、The Middle Worksを、LWは、The Later Worksを指す。

- (1) 例えば、2002年ピューリッツァー賞を受賞したルイス・メナンド (Louis Menand) の *The Metaphysical Club*, Farrar, Straus & Giroux, 2001. (野口良平・那須耕介・石井素子訳『メタフィジカル・クラブ—米国100年の精神史』みすず書房、2011年)、2016年、アメリカ哲学フォーラムで講演・対談をおこなったりチャード・バーンスタイン (Rechar J. Bernstein) の *The Pragmatic Turn*, Polity Press, 2010、また、メタフィジカル・クラブ以前のアメリカ哲学からプラグマティズムを再考しようとする、ラッセル・グッドマン (Russell B. Goodman) の *American Philosophy before Pragmatism*, Oxford University Press, 2015、がある。
- (2) 伊藤邦武『プラグマティズム入門』ちくま新書、2016年、11頁。
- (3) Cheryl Misak, *New Pragmatists*, Oxford University Press, 2007. 本邦でのローティ流のプラグマティズムを検討する文脈を踏まえたパースの再解釈は、伊藤や石田正人(「C・S・パースの真理の収束説」日本科学哲学会編『科学哲学』vol.45, no.1、2012年他)らによって精力的に行われている。
- (4) 山上裕子『デューイの<教材>開発論とその思想』風間書房、2010年、189-183頁。
- (5) 加賀裕郎『デューイ自然主義の生成と構造』晃洋書房、2009年、289頁。
- (6) 谷口忠顕『デューイの習慣論』九州大学出版会、1987年、446頁。
- (7) W. James, *Essays in Radical Empiricism*, Longmans, Green and Co. 1922, p.37. (梶田啓三郎・加藤茂訳『根本的経験論』白水社、1998年参照)。
- (8) W. S. Sellars, *Science, Perception and Reality*, Routledge & Kegan Paul Ltd, 1963. (神野慧一郎・土屋純一・中才敏郎訳『経験論と心の哲学』勁草書房、2006年)。
- (9) よく知られているように、オランダの歴史学者ホイジンガ(Johan Huizinga) は「遊戯の<面白さ>は、

どんな分析も、どんな論理的解釈も受け付けけない] 日常生活と異なる性質のものといい、文化創造の機能として遊戯を特徴づけている。(高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス 人類文化と遊戯』中央公論社、1971年) 14頁。

- (10) J. Dewey, “Interest and Effort in Education”, *MW*. vol. 7, pp.162-163.
- (11) *Ibid.*, p.171.
- (12) この例は、保育所の実習で実際学生も経験している。実習生は、このような導きを教育と捉えている。(平成26年度9月実施期末テストより)
- (13) J. Dewey, *How We Think*, *LW*.vol. 8, p.141.
- (14) J. Dewey, *Democracy and Education*, *MW*. vol. 9, p.166.
- (15) *Ibid.*, pp.180-186.
- (16) *Ibid.*, p.203.
- (17) *Ibid.*, p.146.
- (18) J. Dewey, “Interest and Effort in Education”, p.163.
- (19) J. Dewey, *Human Nature and Conduct*, *MW*.vol.14, p.32.
- (20) 谷口忠顕『デューイの習慣論』36頁。
- (21) J. Dewey, *Human Nature and Conduct*, p.65.
- (22) *Ibid.*, p.68.
- (23) *Ibid.*, p.69. デューイがこのような主張することの背景には、若者の衝動が適切に導かれてきていなかったことへの批判がある。大人のもつ習慣の固定化されたパターンに従って若者を機械化すること、大人の習慣の中にある残忍さや不公正を矯正するようには導かれなないこと、従順に他人の意見に従うことなど、教育ではなく訓練がなされていたことが指摘されている。( *Ibid.*, p.70.)
- (24) *Ibid.*, pp.70-71.
- (25) *Ibid.*, p.71. 括弧内は論者による。
- (26) *Ibid.*, p.71.
- (27) *Ibid.*, p.72.
- (28) J. Dewey, *Democracy and Education*, p.206.
- (29) J. Dewey, *The School and Society*, pp.26-27.
- (30) J. Dewey, *Democracy and Education*, p.360.
- (31) J. Dewey, *Human Nature and Conduct*, p.29.
- (32) J. Dewey, *Democracy and Education*, p.205.
- (33) 例えば、次の論文があげられる。J. Dewey, “The Reflex Arc Concept in Psychology”, *EW*, vol. 5, pp.96-109.
- (34) 中村和世によるデューイとバーンズ (Albert C. Barnes) に関する一連の研究 (『日本デューイ学会紀要』 於) が示しているように、『経験としての芸術』は、バーンズからの影響を受けたものと考えられる。したがって、内的素材としての「生の素材」の記述は、バーンズとの交流によって生じた新たなデューイの論理とみることは可能である。だが、『民主主義と教育』で、性向を「情緒的」「美的」などと形容し、生命のある鑑賞の本質について述べている文を確認するとき、『経験と芸術』で展開されている「生の素材」を駆使して論じようとした意味内容の萌芽は、それ以前に全くなかったとはいえない。

- (35) J. Dewey, *Art as Experience*, LW .vol.10, p.23.
- (36) *Ibid.*, pp.23-24.
- (37) *Ibid.*, p.35.
- (38) *Ibid.*, p.81.
- (39) W. James, *Essays in Radical Empiricism* (1922), Longmans, Green and Co, New York, p.53. (梶田啓三郎・加藤茂訳『根本的経験論』白水社、1998年、54頁)。ジェイムズは、一つの経験が他の経験を<知るもの>として機能するあらゆる仕方について、デューイの*Studies in Logical Theory*を紹介している。経験の連続に関するジェイムズとデューイの比較は、以下を参照。(加賀裕郎『デューイ自然主義の生成と構造』112-114頁。)
- (40) J. Dewey, *Art as Experience*, p.219.
- (41) *Ibid.*, pp.290-291.